なにがなんでも防潮堤建設、なにがなんでもたて割り行政

先日２日、３日と大島の田中浜と小田の浜の防潮堤について意見交換会が開かれました。多くの人がそれぞれ、いろんな方向から意見を述べて時間が足りない程でした。

今回は「治山施設災害復旧事業」として「県農林振興部」の方々が主に説明し、市からも何名かが出席していました。

説明は知事の言う「生命財産を守る」という命題に従って、ただ机上の計算で計画を立て、それを提示しただけのものでした。

震災直後の混乱期に立てられた計画を、一切見直すことなく、とにかく知事の意向に従って、なにがなんでも実行するという、お役人としての正しい姿がありました。

しかしそこには大島の歴史も景観も住民の生活も一切考慮されていません。

大島の防潮堤は全島で計画されていますが、浜ごとに担当部署が違い、大島全体を考えることなく、その担当部署がそれぞれに計画実行しようとしています。

小田の浜を例にすれば、「県農林振興部」「市水産課」「県地方振興事務所」が関係しています。陸からの景観は同じなのに、見えない縄張りがあり、それをお互い尊重しあって他のことを聞いても答えがありません。

震災時、小田の浜周辺の人は沖から来る津波を見て、高台に避難して皆さん無事でした。海が見えたから避難できたのです。

だからまず避難道を、それも夜にでも避難できるように街路灯を設置して、と提案しても一切答えません。避難道は「農林振興部」にとって関係ないからでしょう。

白砂青松の景観を取り戻す為に、砂浜の後ろに松を植えて欲しいとの意見には、松は防潮堤の後ろにしか植栽できない、のひと言です。県の計画通りに造らないと予算は出ないそうで、住民の希望は端から否定されます。いったい誰の為の復興予算なのでしょうか。

田中浜の計画でも同様で「農林振興部」と「県土木事務所」があり、さらに「環境省」がからみます。

環境省はすでに「あずまや」と避難道を完成させ、さらにいま、緑地を造っています。ところが今回の説明では、それらを壊して防潮堤を造るのだそうです。体験学習のベースになる建物と、島に唯一造られた非難道は、単に環境省の予算消化の為のもので、島民や観光客の為のものではないようです。

そしてこの二つの浜でそれぞれ３０億、計６０億の予算が計上されています。「田中浜の災害危険区域の一軒の家を守るために防潮堤を造る」と県の職員は言います。ところが流された２００軒の家に配られた災害義援金は１０７万です。

一軒の助かった家に３０億もの税金を使うのなら、流された家の人に３千万円支給すれば１００軒の家が建ちます。大島では２００軒ほど流されました。二つの浜の予算を使えば再建できます。

また、流された船やイカダをそのお金で作れば、漁業をやめずにまた続けて、離島せずに済む人がいたと思います。

思えば震災後、民主党政権で復興予算19兆円が計上されました。どこへ消えたのでしょう。我々被災者のところには仮設住宅だけで、あとは全国からの義援金、支援物資、ボランティア、台湾からの義援金などです。

北海道から沖縄まで、各省庁の分捕り合戦で、被災者にはほとんど届いていません。１９兆あったら５千万ずつ配っても３８万人の被災者が助かります。

気仙沼市では3年も経とうとしているのに、一軒も災害公営住宅は出来ていません。仮設で亡くなる年寄りが何人も出ています。避難路、避難場所の計画すら示されません。進んでいるのは巨大防潮堤だけです。

今回の巨大防潮堤は、まるで「戦艦大和」です。飛行機の時代なのに巨艦建造にまい進した、戦争末期の軍務官僚そのものです。

三陸一帯に巨大防潮堤が出来たら、三陸沿岸の観光と漁業は壊滅します。「省益あって国益なし」の官僚行政は、もう終わりにして欲しいと思います。

大島中学校仮設
熊谷雅裕